

かごしま林業普及だより

第 15号

(令和6年7月)

目次

(1) かごしま樫資源利活用促進協議会設立総会	・・・【鹿児島指導区】	1 頁
(2) 南九州市森林づくり推進会議	・・・【南薩指導区】	1 頁
(3) 再造林推進に向けた苗木生産施設視察研修	・・・【北薩指導区】	2 頁
(4) 伊佐地区緑の少年団交流集会の開催	・・・【始良・伊佐指導区】	2 頁
(5) 志布志市立潤ヶ野小学校における森林環境教育	・・・【大隅指導区】	3 頁
(6) 再造林技術研修会（主伐・再造林一貫作業）	・・・【熊毛指導区】	3 頁
(7) 奄美におけるかごしま林業大学校開校に向けたPR活動	・・・【大島指導区】	4 頁
(8) 鹿屋農業高校・伊佐農林高校で就労支援講習	・・・【普及指導部】	4 頁

ホームページで試験研究や
林業普及活動、森林環境教育
などの取組を紹介しています！



鹿児島県森林技術総合センター
普及指導部

かごしま椿資源利活用促進協議会設立総会

鹿児島地域では、地域資源を活かした特用林産物である椿資源について、令和5年度から地域振興推進事業を活用し、椿実関係者による県外への先進地研修や技術交流等を通して、県が関係者の意見を集約し、令和6年3月に「かごしま椿資源利活用促進方針」を策定したところです。

方針の策定を通し、椿資源量の把握や椿林の管理、椿実の収穫に必要な人材の確保等の様々な課題があることを再認識したところであり、これらの課題を解決し、かごしまの椿資源の利活用の促進に関する施策を総合的に推進するため、6月25日（火）に椿関係者による「かごしま椿資源利活用促進協議会」の設立総会を開催し、椿関係者（椿実生産者、製油業者、椿資源利活用関連の販売業者）6者とオブザーバーである行政関係者（県、市村）をメンバーとして、今回スタートしました。

協議会の取組みとして、今年度は優良母樹の選定調査、育苗・剪定技術講習会、椿関係ワークショップ開催を計画しており、椿実関係者等が連携し、効率的な椿資源利活用の体制整備を図るとともに、「かごしまの椿」の認知度向上を図っていく取組みを行っていくこととしています。

総会では、予定していた議事の他に、優良母樹の選定方法や県内外に向けた販売方策、行政による普及・PRの要望等、様々な意見が出されたことから、次年度以降の取組みに反映できるよう検討を進めるとともに、「かごしまの椿」が広く知れ渡るよう関係者一丸となって取り組んでいきたいと思ひます。（山之内美穂）



設立総会の状況

南九州市森林づくり推進会議

南九州市では、森林環境譲与税を活用し、市内の森林に精通する林業者等4名を森林づくり推進員として委嘱し、森林整備等の推進を行っています。

南九州市森林づくり推進会議では、森林づくり推進員の委嘱状交付式と併せて、前年度の森林整備の実績並びに今年度の計画等について、関係者の情報共有と推進方策について協議を行っています。

南九州市は、森林経営管理制度に基づく意向調査を旧町単位で毎年3林班程度実施し、所有者の同意が得られた森林については森林組合へ斡旋を行い整備を進めているところですが、担い手の確保やその他事業との労務調整もあり、これらの森林の整備が遅れている状況にあります。

このようなことから、今年度の会議においては、森林の整備を促進するため、施業の一部を地域の林業事業体と連携して進めることはできないか提案を行い、参加者から意見を聞き取りました。

森林組合からは、支所によっては請負による間伐施業の実績がないことから、「請負箇所の選定や施業後の仕上がりには差が発生しないか不安がある。」、「現時点で事業体が請負施業に取り組む意向があるのか不明である。」などの意見が出ました。

こうした意見を踏まえ、今後、管内事業体に対し請負施業への意向を調査し、実施可能な事業体と森林組合との協議の場を設けることとしました。

なお、後日行った聞き取りにおいて2社から請負による施業について前向きな回答があったことから、具体的な内容について更に協議を進めていくこととしています。（山下幸一、長谷川徳幸）



推進会議の状況

再造林推進に向けた苗木生産施設視察研修

6月25日(火)に「さつま町再造林推進検討会」による苗木生産施設の視察研修を開催しました。

同検討会は、町内の素材生産事業者、造林・下刈事業者、苗木生産者及び同町、北薩地域振興局で構成され、昨年10月から活動を開始しました。

昨年度は周囲測量や地拵え・植え付けの研修会を開催しましたが、今回は植え付けで使用される苗木の生産施設の視察や、現場における苗木の取り扱い等に関する研修を開催しました。

当日は関係者を含め約20名が参加し、はじめに室内において県内及び北薩地域振興局管内の再造林の現状や、再造林推進の取組み等について研修を行いました。

その後、普通苗とコンテナ苗の生産施設を訪問し、生産者から現在の生産状況等について説明していただきました。

また、当日参加された造林・下刈事業者の方から普通苗、コンテナ苗の植え付けにおける長所や短所などについて詳しく説明していただき、参加者からは「コンテナ苗が主流になってきているが、植え付けする場所や時期などによる使い分けについて理解できた」などの意見が聞かれました。

今後もこのような研修等を通じて関係者の連携を図り、再造林の推進に取り組んでいきたいと思っております。(安楽真一)

北薩指導区



普通苗（苗畑）における研修状況



コンテナ苗生産施設における研修状況

伊佐地区緑の少年団交流集会の開催

7月20日(土)の夏休み初日、高熊山と本城緑の少年団員の合計21名参加のもと、「伊佐地区緑の少年団交流集会」を開催しました。

牛尾小学校を朝9時前にスタートして、皆で標高412mの高熊山山頂広場を目指し登山。途中途中で「地域にちなんだクイズ」10問に答えながら、約2kmの道のりを登りました。高熊山は、1877年西南戦争において人吉・大口方面での激戦となった地です。現在、「高熊山古戦場」は県の指定文化財に指定されています。

山頂の広場では、森のゲーム大会(計4つ)を企画し、4班に分かれて得点を競い、優勝チームには景品授与という内容を組み立てました。ゲームの種類は①県内市町村の木製パズル、②木製ブロック(積み上げた高さを競う)、③丸太切り(切った輪切りの数を競う)、④スギ・ヒノキ輪切りの観察。皆が口を揃えて「楽しかったー」と言ったのは「丸太切り」と「木製ブロック」でした。輪切りの観察では、年輪を数えたり、植えたスギ等が木材として利用できるまで長い年月がかかることや「伐って 使って 植えて 育てる」森林資源の循環利用の大切さ、SDGs等を説明しましたが、さすが緑の少年団員、SDGsという言葉を知っていました。

この日のイベントで皆が交流を深め、身近な森林と木材にふれる1日となりました。夏の楽しい思い出になって欲しいと思っております。

(神志那 紀子)



木製パズルの状況

始良・伊佐指導区



丸太切りの状況



木製ブロック積みの状況

志布志市立潤ヶ野小学校における森林環境教育

6月8日（土）、志布志市立潤ヶ野小学校で、森林環境教育を実施しました。

今年度大隅指導区では、7校で森林環境教育を実施しますが、その内の6校が旧曾於郡（現曾於市、志布志市）で計画されています。

私は、緑の少年団の担当ということもあり、潤ヶ野緑の少年団のある潤ヶ野小を担当することになりました。

今回は、親子参観日ということで、「親子で実施できる木工体験ができないか。」と学校側からの要望があり（しかも、授業は1コマ45分）、検討した結果、簡単に楽しく作れるスギ板のコースターづくりをすることにしました。

はじめに、私の方から、スギの特性や木表・木裏の違い、森林は「伐って→使って→植えて→育てる」のサイクルで循環可能な資源であることを説明した後、早速コースターづくりを開始しました。

子どもたちは、紙やすりを使って木口面や四隅の角を削った後、事前に用意していた下絵を見ながら、思い思いの絵を書いていた。

中には余った板でまだ作りたい子どもたちも出てきて、準備した100枚の板はすべて素敵なコースターに変身しました。

最後に、スギの学名（*Cryptomeria japonica*）は、日本の隠れた財宝という意味があることを伝えると、父兄だけでなく先生方もびっくりされていました。

今回の学習をきっかけに、郷土の誇るスギについて、理解を深めるきっかけとなればいいなあと思った次第です。（岩智洋）

大隅指導区



親子で楽しく作っています



コースター完成

再造林技術研修会（主伐・再造林一貫作業）

種子島地区では、これまで利用間伐を主体とした木材生産を行っていますが、間伐対象林が減少する中、主伐による木材生産へ移行する時期を迎えていることから、主伐後の再造林を推進するため、再造林技術研修会（主伐・再造林一貫作業）を開催しました。

研修会は、2回に分けて行うこととし、1回目は主伐・再造林一貫作業の技術的な内容を学ぶ室内研修、2回目は、座学で学んだ内容を実際に見て、やってみる現地研修としました。

1回目の室内研修は、6月20日に熊毛支庁の会議室で行い、管内市町の林務担当職員と市町有林を担当する課の職員、実際に現場で主伐・再造林一貫作業を施業する林業事業体の林業技能者に参加していただきました。

室内研修では、①一貫作業と従来の作業方法の違いや一貫作業のメリット、一貫作業にはコンテナ苗が必須であること②効率的・効果的な機械地拵えの方法や再造林を想定した棚積みのサイズ等③植栽地での苗木管理（苗木を乾燥させないこと）と植え付け方法等について説明を行いました。特に、主伐・再造林一貫作業については、地拵えの出来・不出来がその後の施業に大きく関わってくることを繰り返し説明しました。

2回目の現地研修は、9月下旬に管内のスギの主伐跡地で開催することとしており、室内研修で説明した地拵えの施業の視察と、コンテナ苗による植栽を実際に行ってもらおうこととしています。

種子島地区で主伐・再造林が本格的に始まれば、主伐による木材生産量の増加で収益性の向上と地域の活性化が図られるとともに、森林資源の循環利用を図る再造林を行うことで、再造林→下刈→間伐という新たな就労の場と島内産材の安定供給体制が構築されることが期待されています。

（岡崎博樹）

熊毛指導区



研修会の状況

奄美におけるかごしま林業大学校開校に向けたPR活動

大島指導区

本県の林業就業者は、高齢化や木材価格の低迷による厳しい経営環境等を背景に、緩やかな減少傾向で推移しており、離島である大島管内では新規就業者の確保に特に苦慮しているところです。

そのような中、令和7年4月に開校する「かごしま林業大学校」をPRするため、管内にある全ての高等学校（9校）を訪問し、進路指導の先生へかごしま林業大学校の概要等を説明しました。

ご存じのとおり、管内には喜界島から与論島まで複数の離島があります。6月は梅雨の真っ只中ということもあり、飛行機の離着陸に不安を抱えての訪問となりましたが、案の定飛行機が視界不良で着陸できず、目的地直前で奄美へ引き返すというハプニングを1週間のうちに2回も体験しました。

そのようなハプニングを乗り越えて、各学校を訪問し、かごしま林業大学校の開校目的や選考方法、研修内容等を説明しましたが、多くの先生から「奄美では現在も林業が行われているのか」、「農業の仕事内容はイメージできるが、林業はイメージできない」などの意見が聞かれ、スギ・ヒノキがほとんど植えられていない奄美では林業が行われていないと思われていることがわかりました。まずは、大島管内の小・中・高等学校の児童・生徒や先生に対して奄美における林業の実態を理解していただき、地元の学校の卒業生が活躍していることを伝えていかなければ、林業就業者の確保は厳しいと感じたところです。

これまで小学校を中心に森林環境教育を実施しているところですが、今後は対象を中・高等学校にも広げ、内容を見直すことも視野に入れながら、林業就業者の確保・育成に向けて普及業務に取り組んでいきたいと思っております。
(穂山浩平)



説明の様子



高等学校での森林環境教育(R4)

鹿屋農業高校・伊佐農林高校で就労支援講習

普及指導部

5月23日（木）に鹿屋農業高校（農林環境科26名）、5月28日（火）に伊佐農林高校（農林技術科9名）において、林業労働力確保支援センターによる、高校生の地元定着促進のための就労支援講習が開催され、地域の林業事業者と共に林業の仕事や魅力、森林を守り育てることの重要性等について、講習を行いました。

普及指導部では、本県の森林・林業の現状や林業の現場での仕事（造林、下刈り、間伐、主伐）について、写真を交えて説明を行い、その後、レーザーコンパスを用いた樹高測定や丸太の輪切りを観察しながら、林齢や年輪から見る成長の変化などをクイズ形式で学ぶ、体験実習を行いました。講義では質問もなく、どれくらい興味を持って貰えたか不安でしたが、実習に入ると、目を輝かせ活発に質問が出るなど、体験による刺激の効果を実感しました。

各事業者の代表による会社概要の説明では、高性能林業機械等による機械化の現状や休暇、給与など具体的で熱のこもった説明に刺激を受け、林業への興味が高まった様子でした。

また、鹿屋農業高校では、4事業者（大隅・曾於地区・曾於市の各森林組合、上野物産株式会社）との質問・相談コーナーも設けられ、各事業者のブースでは、身近な卒業生の体験談や福利厚生・賃金など具体的な質疑も相互に交わされ、さながら集団面接の様でした。

現在、県内で唯一林科系の学科がある両校ですが、2年生時の専攻の選択で林科コースを選んだ生徒は、鹿屋で8名、伊佐で3名と非常に少ない状況となっています。一方、林業事業者への就業は、林科コース以外の生徒もいることから、こうした講習を通じて林業を知ること、選択のきっかけとなることを期待するところです。

(小牧利明)



丸太の輪切りを使った実習



座談会での事業者ブースの状況